

な世界を作つてやる事が、私達大人の役目じゃない
でしよるか。

霞ヶ浦通運丸

保 立 俊 一

明治十四年土浦魚会社が創立された。其の当時、土浦の鮮魚は銚子から蒸気船で運ばれて来た。生魚を運ぶ蒸気船というので生蒸気と呼ばれて居り、最初は荷物船であつたのが次第に御客も乗せるようになった半貨客船であり、銚子、土浦間は昭和五年頃まで続いて居つた。

最初は、蒸気機関で両舷の水車を廻す外輪船であつたが焼玉エンジンに改良され、私が叔父と大正十五年の夏銚子に遊んで帰りに乗つた通運丸は焼玉エンジンの船であつた。夜鮮魚を積んで銚子を出航、土浦に翌朝到着するといふのんびり定期船である。其の日は夜九時に銚子の新川棧橋を出航するので、鯨音様のすぐ下の利根川岸にある船着場へ行つた。当時銚子の利根川は護岸工事が出来ていなくて、川岸の砂浜から川の中に棧橋が出されて居り、其処が通運丸の乗船場と波崎、銚子間の

渡し船の棧橋になつて居つた。棧橋に通運丸は横づけになつて居り、屋根の上には魚の樽や箱も積まれて出航用意をして居つた。利根川の流れを避るには上げ潮の時でないといふので、いわゆる潮待ちをして夜の上げ潮の時刻に出航するので毎日の出航時間は定まつた時間では無く其の日は午後の九時頃の出航だつた。

叔父と二人で船に乗込む。一番前が操舵室、次に六畳敷ぐらゐの畳の船室、次が機関室で両舷に直径三メートル位の水車がついて居つた。次に八畳位の船室で荷物は屋根の上、お客は私達二人の他小見川まで行くといふ人達と五人位、出航の時間、ガンガンというドラの音につづいてポーという汽笛を響かせて通運丸は焼玉のエンジンと水車の水をかく音も勇ましく利根川を上りはじめた。うす暗い五燭光ぐらゐの裸電球と両舷の赤と青の舷灯の明りで船室のお客の顔が赤くなつたり青くなつたり無気味な室の中で、真暗な水面を切つて進む船のエンジンの振動に身をまかせて窓から外を物珍しくながめる。遠く犬吠崎の灯台の光が薄い夜空に線を描いては消える。沿岸の村々の灯が螢火のように波の上に光る。単調な船のエンジンの響と水音を聞いているうち、いつの間にかうとうと浅い眠りに入る。然しドコドコという船の振動で熟睡することは出来ず、途中何回か船着場に着いては